

三宅晶子

さん

●株式会社ヒューマン・コメディ 代表取締役

犯罪歴や非行歴のある人専用の求人誌で社会復帰の架け橋に

受刑者・出所者などの採用支援や教育支援に取り組んでいる三宅晶子さん。2018（平成30）年3月には、日本で初めての受刑者専用求人誌『Chance!!』を創刊。犯罪歴や非行歴のある人の社会復帰のための架け橋作りに尽力している。罪を犯した人の生きづらさの現状や、再び輝かしい未来に向かって歩み出すための課題などについて伺った。

●聞き手……白井美樹（ライター）

—三宅さんの子ども時代から今のお仕事に就くまでの経緯を教えてください。

三宅 私は中学のころから非行を繰り返して、高1のときに退学になりました。人生の傾きを自覚しましたが、いつかこの経験を生かそうと漠然と思ったときでもありません。飲食店で働き始めたある日、父から1冊の本を手渡されました。それはデカルトの本。難しくて読めたものではありません。勉強すれば読めるようになるのかも——そんな気持ちから高校に入り直すことを決めました。

その後紆余曲折の末、早稲田大学の第二

文学部に合格。卒業後は、輸出入代行会社を経て、大手の情報通信系企業に10年ほど勤めました。

—なぜそこから受刑者支援の仕事をしたと思ったのですか？

三宅 人が好きだったので、人材育成の会社に転職しようと思っていました。でも、その前に自分の経験も生かせると考え、生きづらさを抱える人や課題の多い人のことを知りたくて、自立援助ホームや受刑者支援団体などでボランティアをすることにしたのです。そんな中で、刑務所から出てき

ない人が非常に多いのです。

—そういう人たちを支援するべく会社を設立されたのですか。

三宅 はい。特に会社設立にあたっては、大きなきっかけがありました。

ある施設にボランティアに行ったときに、ひとりの女の子と仲良くなりました。彼女は出会った当時17歳でしたが、両親か

ら育児放棄され、15年も施設で暮らしていたのです。

そんな彼女から、2015（平成27）年の4月に手紙が届きました。そのとき彼女は罪を犯して少年院に入っていて、手紙には他愛のない内容が書かれていましたが、少年院を出た後は、元の環境に戻らなくてはならないことが私には残念に思えました。私はもつと彼女と深く関われる方法がないかと考えて、身元引受人になることを

た人が、なかなかやり直しが効かないという現状を目のあたりにしました。

—どんな状況があったのですか。

三宅 まず刑務所での作業の報奨金は、時給7円からスタートと聞いて愕然としました。これだと、刑務所を1〜2年で出てくる人は、手元に2〜3万もあればいい方です。しかも、住所が定まっていけない人は、簡易宿泊所やネットカフェなどに泊まるしかなく、まず仕事は得られません。そのため、所持金を使い果たした後は、再び窃盗や無銭飲食などで、刑務所に戻らざるを得

決めました。

そして彼女を受け入れる環境として、どうしたら幸せなのか考えたとき、私が少年院や刑務所出所者を支援する事業を起し、そこで彼女を雇用したらどうかと考えました。それなら彼女は、過去を隠すこともなく、同じ境遇の人たちに親身になって対応でき、彼女の過去が価値に変わるのではないかと思ったのです。

そこで、その年の7月、彼女の誕生日に会社を登記しました。毎年、その日に「生まれてきてくれてありがとう」と、みんなが祝ったからです。彼女も泣いていましたが、私はもつと泣いていました。つらいできごとでも全てネタにして笑えるようにというのが社名のヒューマン・コメディはここから始まったのです。



Profile

●みやげ・あきこ●

早稲田大学第二文学部卒業。日中貿易事務、北京・パンクーパー留学を経て、2004年大手情報通信系企業に入社。2014年に退職後、自立援助ホーム、受刑者支援団体のボランティアをやる中で、出所者等の社会復帰が困難な現状を知り起業。受刑者専用の求人誌を創刊し就労支援を行っている。研修・講演等多数。

—会社は順調にスタートしたのですか。

三宅 ひとまず会社を登記したものの、最初は経験も知識もお金も事業計画もなく、ただ教育や採用に関わることをしたいという思いだけでしたので、とりあえず更生保護の活動をしている人たちとお会いすることから始めました。

また、自分がやろうとしていたことを多くの人に伝えたいと思っていると、講演の依頼を頂くようになりました。そんな中、ある大きなプレゼンテーションの大会に出場し、2千人の観客を前に自分の思いを語り、大賞を受賞しました。それをきっかけに応援してくれる人が増え、2016（平成28）年の10月からは職業紹介事業の営業を開始したのです。

—その後事業はうまく展開しましたか。

三宅 それが、なかなか初めはうまく機能しませんでしたね。当社の人材は、せっかく企業に紹介しても、すぐにやめたり、行方不明になったりしたのです。また、刑務所の中で、出所後の助けを必要としている人がたくさんいるのは分かっているのに、

—採用後の見守りもされているのですか。

三宅 はい。採用後に雇用先の会社に不満を持つて連絡くれた人ときは、本人と社長と私、そして出所者で当社のボランティアスタッフの方を交えてミーティングをしました。結果、自分と同じ立場である出所者からのアドバイスを受け入れて、その後は円満に働いています。企業と人材の間を取り持ち、不満や不安の芽を早く見つけて摘み取るのが、当社の役目かなと思っています。

—刑務所に入った経験を持つ人がいけば必要としている支援は何だと思えますか。

三宅 まずは、社会生活を送るためのトレーニングの場ですね。定時に出社して、定時まで仕事をして、という生活を経験したことがない人がほとんどです。ですから、いきなり就労するのではなく、職業訓練と同時に教育も受けられる場所があればいいと思います。

また受刑中に、免許など有効な資格が取れたらいいですね。身分証明書にもなるような免許があれば仕事の幅も広がります。

当社の存在を知ってもらう機会がなかなかないのもジレンマでした。連絡をくれる人は、出所後に出所者雇用などをネットで調べたりできる、もともと情報収集のスキルが高い人に限られており、それ以外の人はなかなか伝えられなかったのです。

—そこで、求人誌の『Chance!!』を発行することにしたのですか。

三宅 そうです。18（平成30）年春の創刊号は、受刑者支援団体会報誌に同封するという協力を得て、150人に直接送ることができました。初めはあまり反応がなかったのですが、6月に夏号を800人に送ったところから、受刑者から手紙が届くようになってきました。これまで4号出していますが、約50人から応募があり、19人採用が決まりました。その中には、これから出所してくる予定の人も含まれています。

—三宅さんは、どのように掲載企業とコンタクトをとっているのでしょうか。

三宅 最初は建設業界が集まる会に参加して営業したり、昔はやんちゃだったけど今

たとえば高齢になって力仕事ができなくなっても、免許や資格があれば何かしら仕事があるからです。

—三宅さんが支援している人たちには、何か共通点がありますか。

三宅 まず共通するのは、孤独だということでしょう。そして、コミュニケーション能力がすごく低い人が多い。お金の使い方が粗く、依存体質の人も多いです。

そして、レットテルを貼られるのを敏感に感じています。周りの人が、それを個性と捉えて、「過去は過去、これから人を喜ばせるように頑張ろうね」と思ってくれたらありがたいです。

は経営者として成功している知人などに声をかけたりしていました。

ただ、2号目以降は、新聞や大手のネットニュースなどに取り上げられたのを見た事業者さんの方から連絡がありましたので、こちらから営業をすることはあまりしていません。

—受刑者専用求人誌の事業で、苦労されている点がありますか。

三宅 出所者雇用に慣れていない企業は、トラブルが生じると、「どうしてくれるの？」と当社にクレームが入ります。

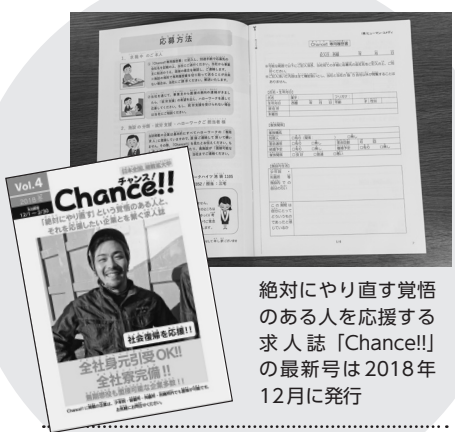
現在は、出所者雇用の経験がない事業者さんには勧めないようにしています。雇用の難しさを分かった上で「それでも採用したい」という企業でないとなかなか難しいからです。

出所者は「もう二度と戻らない」という覚悟がある人が多いので、雇ってくれたことに恩義を感じて一生懸命働く人も多いです、中にはそれを評価してくれる企業もあるのですが、理解が広がるには、まだ時間がかかりそうです。

—今後の抱負や展望を教えてください。

三宅 当社も多くの出所者を雇用したいので、求人誌のほかに収益の柱をつくりたいと思っています。同時に求人誌の掲載企業やスポンサー企業を増やしていきたいです。いずれは、採用された企業での就労が続かなかった出所者が、帰って来られるホームをつくれたらと思います。

とはいえ、人生を前向きに変えるのは、私でも企業でもなく本人です。私はチャンスやきっかけをつくるだけなので、「私なんかおかしなやつ」という変な気持ちはありません。でも、できる範囲で精一杯フォローしていきたいと思っています。



絶対にやり直す覚悟のある人を応援する求人誌『Chance!!』の最新号は2018年12月に発行

Webでも閲覧できる。
<https://www.human-comedy.com/>